

志村 恵「本のなかのふたごたち」③

松岡享子・作、林明子・絵：『おふろだいすき』

今回は、絵本の名作の一つ、『おふろだいすき』を取り上げます。この絵本は、松岡享子と林明子という、日本を代表する絵本作家の合作です。文章も分かりやすく伸びやかですし、絵もほんわり、お風呂の絵本にぴったりです。

日本人は、一般的に言って、お風呂が好きな民族だとされています。特に、温泉や銭湯などは、日本の文化や生活に欠かせない特徴的なものです。しかし、子どもにとってはどうでしょうか？僕には娘が二人いますが、僕は、彼女たちが産まれたときからの「お風呂係」です（帰宅が一般の方より早かったせいもあります）。ベビー・バスに、赤ちゃんを腕に抱えて、そっと入れ、ゆっくり洗ってやるのは、気持ちの安らぐ、楽しいひとときでしたが、やがて、子どもは大きくなり、一緒にお風呂に入るとなると、段々と重労働になってきます。特に、こちらがくたびれ果てているときは大変です。そして、娘たちも、次第に独立心が芽生えてきて、「一人です」「自分です」と、もたもたと自分で体を洗ったりするようになります。でも、子どもはいつでもお風呂が好きとは限りません。お風呂が嫌いな子もたくさんいますし、お風呂が好きな子でも、面倒がってなかなかお風呂に入らないときもあります。そんなときに読むと楽しい絵本が『おふろだいすき』です。

扉を開いてタイトル画を見ると、「まこちゃん」（僕のふたごの相方と同じ名前です！）が、一人で服を脱いでいるシーンが目飛び込んできます。元気がよい子なののでしょうか、真っ黒な足跡が三つついてます。まこちゃんは、一人でお風呂に入るのですが、実は、仲間と一緒にです。「プッカ」というあひるが一緒なのです。一人なのですが、仲間がいるわけです。この自立的な姿勢と共同的存在というものが、この絵本の一つの柱です。ところで、子どもにとって、何かを一人でするときに（お風呂に入る、一人で寝るなど）、人形やちょっとした道具などが一緒にいてくれると心強いようです。ちなみに、ドイツ人は子どもの時から一人で寝るのですが、その時、一緒に寝てくれる人形（クマが多い）を一生大切にします。大人になっても、その人形は大切にとっておくようです。

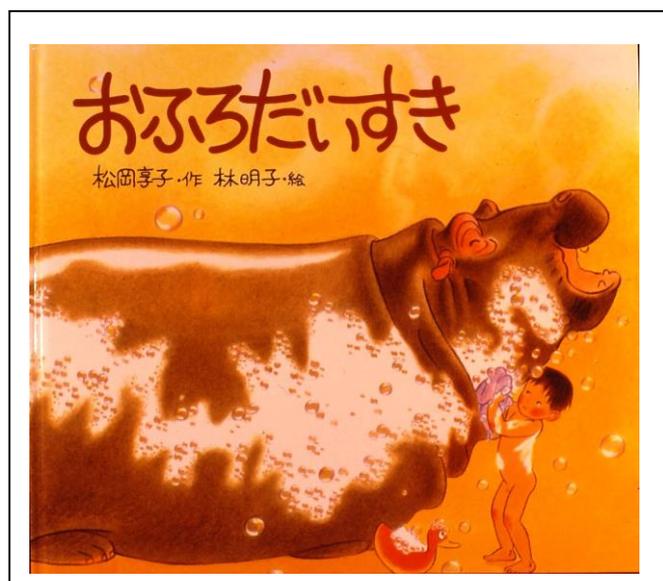
まこちゃんは、始めにプッカを湯船に入れてあげ、「ゆかげんはどうですか、プッカさん？」と聞きます。それから、自分も体を洗って湯船に入ると、今度は、お母さんが外から、「まこちゃん、ゆかげんはどうですか？」と訊いてくれます。プッカも、マコちゃんも、答えは同じです：「あつくもなし、ぬるくもなし、ちょうどいいかげん」。この交差するやりとりに、親子の、そして人間の（この場合、人間とアヒルか）信頼に満ちた交換が表されています。湯気を背景にして、その交換が柔らかな印象を与えます。そして、その優しい交換に励まされたのでしょうか、湯船から次々と動物が出て来るのです。まず、うみがめ。次に、ふたごのペンギン。それから、オットセイ、かば、最後に、なんとくじら。ですから、浴室はいつのまにか、何倍、何十倍の大きさになり、不思議な空間になっています。お風呂に入りながら、色々空想することの何という楽しさでしょうか。次から次へと、観念連想が広がっていきます。そして、最後には、まこちゃんはお母さんの広げたタオルの中へ包み込まれます。

さて、ふたごです。そう、ふたごのペンギンです。これがまた不思議なふたごなのです。このふたごペンギンは、ジョンとジムという名前で、競争に勝った方が兄になります。だから、まこちゃんのお風呂に現れたときには、ジムが兄なのですが、その前は、ジョンが兄でした。その前の前は、ジムで、その前の前の前は、……。面白いふたごです。

最近のふたご研究によれば、昔ほど「兄・姉的性格」と「弟・妹的性格」の区別がつきにくいペア（あるいは、スーパー・ツインズでしたらそれ以上）が増えているようです。それは、分け隔てしないで、いわば民主的に育てている育児者が増えているからです。しかし、相変わらず、社会的な規制はかかってきて、「どちらがお兄ちゃん？」「どちらがお姉ちゃん？」と必ずと言っていいほど人々は聞くのです（「どちらが弟さん？」「どちらが妹さん」と聞く人はほとんどいません）。ふたごとその家族へのアンケートでも、嫌なことの上位に、こうした質問を受けることがランクされるのは、周知の事実でもあります。僕も、小さいときは、よくそう聞かれました。面倒くさいので、「おんなじ」と答えたりしましたが、それでも、「ふたごで同じでも、どちらかが先に産まれたはずだ」と更にしつこく聞かれると、半分怒りながらも、「僕の方が兄です。先に、産まれましたから」と答えなければなりません。そして、「いや。先に産まれた方が、弟だよ」と親切にも教えてくれるような人がいれば、「昔は、日本では先に産まれた方が、弟だったけど、アメリカやヨーロッパでは先に産まれた方が兄なんだ。今では、日本でも産まれた順番で決めるんだよ。でも、結局、お父さんとお母さんがそう決めたとおりになるんだ」と累々と説明する羽目になったものです。「あー、面倒くさい。あー、嫌だなあ」と思いつつも。

ところで、「分け隔てしないで、いわば民主的に育てる」とはどういうことでしょうか。これはむしろかしいことです。以前、ふたご研究者でご自身もふたごのお母さんになられた天羽先生が、「自分では平等にあつかったつもりでも、子どもたちは案外違ったふうにとることも多かった。逆に、違うことをしたのに、平等だと感じてくれたときもあった」とおっしゃっていたことがあるのですが、たとえば、同じ服を着せ、同じこずかいを与え、同じようにチャンスを提供したとしても、決して「分け隔てしない」ことにはならないのです。むしろ、心理的な平等感・公平感の方が重要だと思います。一人一人の個性にあつたものを与えるならば、違うものでも、ふたごは、公平だと感じるはず。もちろん、「やっぱり、同じものが良かった」と言うこともよくありますし、同じものを欲しがるときもあります。しかし、子どもとしっかりと向き合っていさえすれば、それぞれの個性や好みが見えてきますし、しっかりと説明したり、話し合ったりすれば、外面的には不平等に見えることでも、本人たちにとっては、かえって「分け隔てしない」と感じられることでしょう。要は、親がそういう姿勢を常に見せることです。平等にしようとしている意志をはっきりと伝えることです。そこのところがしっかりしていれば、瞬間瞬間の不公平や不平等など、大した問題にはならないと思います。

本当は、ジョンとジムを題材に、ふたご間の競争意識についても問題にしたいのですが、紙面の関係で、次の機会に譲りたいと思います。このふたごペンギンは、競争して勝った方が兄になるのですが、やはり、常にいつでも競争するのはよくはありません。でも、ふたごの兄と弟が次々に入れ替わるというのは、とても面白いことです。たとえば、じゃんけんで決めたりすると良いかも知れません。「じゃんけんで勝ったから、今日は俺が兄だぞ」なんて。こうした余裕というか、相対化は、特に、一対一の関係であるふたごの場合は重要だと思います。上下関係が固定化しない、自由な関係。ふたごやスーパー・ツインズが、その自由な関係の中で、社会的規制ともうまく調整して成長してくれれば本当に嬉しいことだと思います。



『おふろだいすき』書影

松岡享子・作、林明子・絵：『おふろだいすき』福音館書店

『ツインズ』27号（ビネバル出版）から転載